

タイトル

「ポトフと再婚した女」

著者名

明日腹 ベイコ（あすはら べいこ）

あらすじ

料理が嫌いだ。それでも、料理以外出来る事がなかった彼女

は、今日もロールキャベツを巻いていた。それでも彼女は、

ポトフだけは決して作らなかった。

文字数

三六四八文字



ポトフと再婚した女

明日腹　ベイコ

昔、母が作ったポトフは、じゃがいもも半分に切っただけ、人参だって、ゴロツと入ってて、骨付きの、鶏もも肉が沢山入ったヤンチャなスープだった。

でも、飲むと、塩味がふんわりと鼻を通り抜けて、みぞおちをあっという間にポカポカにした。ヤンチャで、優しいポトフが私の初恋だった。

私は今週のランチの仕込みで、ロールキャベツを大量に巻いていた。なんて手のかかるやつらなのかしら……心の中で呟いてると、巻きかけのロールキャベツが、私に肉のタネを飛ばしてきた。

「ブツブツ文句いってねえで、早う巻いてけや」

口の悪いロールキャベツだ。

「あんたは、鍋の一番下に敷き詰めてやるから」

パツンパツンに巻いたロールキャベツを、これまた鍋の底にしき詰められた仲間たち

の間に押し込めた。

今からくったくっただに煮込んでやるからね。

和出汁とコンソメ、それに少しのトマト、ローリエも入れる。

スープの味を確かめると、何だかイマイチだった。塩や何やと継ぎ足して、

まあ、これでいいかと、鍋の火を止めて、蓋をしめた。

「中途半端な仕事すんなよ」

鍋の中からくぐもった声が聞こえたが、聞こえないふりをした。

はたして、いつからだろう。料理が嫌いになったのは。

私は子供の頃、母が作ったポトフに感動して、料理を始めた。そして、その中でも母が、教えてくれたポトフは何度も何度も作った。そしたら、ある時ポトフが私に話しかけてきた。

「お前、俺の事好きなの？」

私はポトフをじっと見た。じゃがいもと人参がゴロッと入ってて、骨付き肉はスープに、手を突っ込んで食べる。なのに、口にふんわりと広がる野菜と鶏の優しいポトフ。

「大好きだよ、ポトフ」

ポトフは、嬉しそうに照れ笑いをした。

「じゃあさ、お前が大人になったら結婚してやるよ」

「ポトフと結婚？本当に？うん、する！私ポトフと結婚する」

じゃあ、美味しいポトフ作れる良い女になれよ。おませたポトフ少年を、私は一気に飲み干した。

大人になった私は、洋食店で鶏ガラの取り方を教わった。決して、煮立たせ無いように、ゆっくりじっくり煮込む。そして澄んだスープが、出来上がる。

ここで教わるまで、知らなかった。母が作ったポトフには、鶏ガラが入ったままだった。

「どうりでヤンチャなポトフだったわけだわ」

大人の私が作ったポトフは、澄んだスープに一口サイズの野菜がコロコロと入っている。

シェフに上手く出来たなど、ポトフを褒めてもらった。

満足気に自分の作ったポトフの鍋を覗き込んだ私にポトフが語りかける。

「美味しく作ってくれたね」

久しぶりに、会ったポトフは、素敵な青年になっていた。

「頑張ったわ」

「良い女になったね」

「あなたも」

二人はそうして、結婚したっけ。

「おいおい、昔の男の話かよ。そんな事より俺達は、どうなんだよ。一味足りない様だぞ？」

私はロールキャベツの言葉にため息をついた。最近は何を作ってもこう。皆ブーブー言ってくる。豚の生姜焼きだって、デミグラスソースのオムライスだって、この前は小松菜のナムルまで。

「もう、皆うるさいうるさい！」私はキッチンから飛び出た。

料理を、仕事にしてからほどなくして、料理をする事が楽しくなくなっていた。朝から晩まで働いて、作りたいものも作れない。仕込みだけの日々。ある日家で、ポトフを作って飲んだら、何も感じなくなっていた。食べる気になれなくて、ポトフはついでにお皿の中で冷めてしまった。

「僕の事、もう、好きじゃない？」

「分からない。分からなくなった」

「そっか、寂しいな……」

そうしてポトフは、私の元から去っていった。

「ロールキャベツ、とっても美味しかったわ。特にスープが」

常連さんが、帰り際にそう、私に言って下さったのに、私は心の中では、口の悪いロールキャベツが頭に浮かんだ。

「ありがとうございます」

あいつが美味しいって？イマイチロールキャベツ。私は愛想笑いでお客様を見送った。

休憩中、オーナーとロールキャベツを食べていると、口に頬張りながら、オーナーは答えた。

「うんうん、これ、すごく美味しいよ」

「そうですかね。何か、微妙なんですよね」

「貴方いつも、そういうね。いつも割と美味しいよ」

「何か、何か足りないんですよ。でも何か分からなくて」

「足りないようには思えないけど。やっぱり料理と真剣に向き合っていると、他の人が分からない何かがあるのかしら」

それはないと、首を横にふる。

「いえ。私は向き合っているとは言えないです。料理しか、やれる事がないのでやるだけです。あ、でも仕事なんで、ちゃんとやりはしますので」

ロールキャベツを半分残して、私は席をたった。

ロールキャベツが好評で、次もスープ系にしようと、オーナーが私に提案してきたのは、ポトフだった。

「ポトフは、もう、何年も作ってません。作れません」

「でも、もう来週のメニューにしてみましたから、お願いね」

「もう、別れたんです！」

オーナは首をかしげたが、そのまま押し切られてしまって、私はポツリキッチンに残された。

「ああ、ポトフを作るなんて気が狂いそう！」

次の日、私は仕事を休んだ。それでも、家でご飯も作る気になれなくて、久しぶりに実家に帰ることにした。

「あんた、仕事は？」母は、拍子抜けした声を出して、私を見た。

「休み」

「そう。それは、丁度良かった」

母はそう言うと、何やらキッチンで支度を始めた。不意に、懐かしい匂いが鼻をつく。これは――

「あんたの店のインスタ見てね、来週はポトフだっていうから、久しぶりに私も作ったのよね」

私の前に出されたポトフは、大きなジャガイモと人参と、鶏の骨付き肉。それと、鶏ガラが入ったままの懐かしい少年のポトフ。

「お母さん、だから鶏ガラは取るんだよって言ったじゃん」

「いいの、これがお母さんのポトフなの」

母のポトフから、良い香りがした。

「ずっと作ってなかったのに、どうして急に作ったの？」

「これは、沢山作るから美味しいのよ。でも、あんた達が家にいなくなったら、大量に作ってもしょうがないし、そのまま作らなくなっちゃったのよね。でも、何だか久しぶりに食べたくなったの」

もう何年も何年も避けてきたポトフ。

一口スープを飲むと、懐かしいあの初恋のポトフ。

「おいしい」

夢中で食べる私を母が不思議そうに見ていた。

「あんた、何でポトフ作らなくなったの？あーんなに、大好きだったのに」

「もう好きじゃない」

そう言う私になったポトフの皿をとって、もう一杯つぐ母は、

「そうは見えないけど」

と、また山盛りになった少年ポトフを、私の前に差し出した。

「料理が好きじゃなくなったから」

「そう言う時期もあるわね。お母さんだって、お父さんの事大嫌いなときもあったからね。時間がたつとね、また変わるよ。本当に嫌いだったら、料理の仕事続けてないはずだもの。」

「でも、何作っても、美味しいと思えないの」

母の適当に煮込んだポトフはこんなに美味しいのに、自分はどんなに手の込んだ物を作っても、何か足りないんだ。

「でも、ロールキャベツも人気だったし、味には問題ないって事じゃない。問題はあんた自身なんだわ」

そんなのわかってるよ。また料理がーポトフが好きになれたら、どんなにいいか。

人生のほんのささいな理不尽と自分の弱さのせいで、私はポトフと別れたんだ。

その日の夜、一人店のキッチンで、鶏ガラをとる。コトコトと、静かなキッチンに、湯が泡立つ音だけが聞こえる。私はそれをボーッと見ていた。すると、どこからともなく聞こえる。

「ボーっとしてたら、また濁ってしまうよ」

「分かってるよ、ちゃんと見てるよ」

「いや、僕じゃないよ。君の、心だよ」

私の心？

「そうだよ。最初は強火が過ぎたね。自分の気持ち。コントロールするのって、若いうちは難しいもんさ。でも、ほらしばらく弱火でコトコトしてきただろ。今の僕みたいにアクも全部とれて。もう、君の心は綺麗に澄み切ってるはずだよ。」

静かなキッチンで、私はポトフを作る。一口サイズの綺麗に切られた人参達が、綺麗な黄金色のスープで楽しげに泳いでいる。

「君はちゃんとお客様の事を考えて僕たちをこの大きさにしたんだね。君はいつだってそうさ。」人参が私に言う。

クローブも入れて華やかな野菜のポトフが出来上がった。甘くてスパイシーな香りのする、少し大人なポトフ。

お皿に盛って、一口すする。やっぱり何かが、足りない。

お皿の中のポトフを見つめた。

母に教わって作ったヤンチャで優しいポトフ。

シェフに褒められた、素敵なポトフ。

悔しさと、憤りが混じって、グチャグチャになってしまったポトフとの別れ。

「やっと作ってくれたね」

大人の香りのポトフは、私に優しく話しかけた。

「会いたかったよ」

ポトフから立ち上がる湯気が私を優しく包む。

「私も会いたかったです。会いたかったです」

ああ。私は、好きなんだ。やっぱり、ポトフが。

ポトフの中に涙が何粒も落ちた。そのスープを、私はすすった。

温かさが心に染み入る。昔の想いと、今の私の想いが香りと共に駆け巡る。

「とっっても、おいしい」

